

帰化植物としてのシンテッポウユリ

樋口 幸男

(人間社会学部社会園芸学科)

Lilium × formolongi

HIGUCHI Yukio

1. はじめに

ここ数年、お盆のころになると多摩キャンパス周辺の道路脇の緑地帯で白いユリの花を見る機会が多くなってきた。最初は誰かが植えたテッポウユリくらいにしか思っていなかったが、良く見てみると葉の形状もテッポウユリとは異なり、人為的に植えられたものとは考えにくい場所で咲いていることが多く、自然繁殖したものであると推察した。このユリの素性について、まず考えたのは台湾原産のタカサゴユリであったが、いろいろ調べているうちに、切り花としても広く利用されているシンテッポウユリである可能性が高いことがわかった。そこで、今回は近年急速に野外で自然繁殖し、帰化植物となっているこのシンテッポウユリについて書かせていただくことにした。

2. シンテッポウユリの来歴

シンテッポウユリは台湾に自生するタカサゴユリ (*Lilium formosanum*) と日本の琉球・奄美に自生するテッポウユリ (*Lilium longiflorum*) の交配によって生まれた園芸種である。そこで、まずはじめに、両原種の特性について述べることにする。

テッポウユリは30cmから120cmの茎の先端に、花被の内外ともに白色でラッパ状の花を咲かせ、花径は15cmから18cm、花粉は黄色をしている。さく

果には200から350の種子があり、種子繁殖の場合、発芽から開花までは数年を要する。従って、園芸種は鱗片挿し等の栄養繁殖で増殖された球根が利用されている。

タカサゴユリは茎長30cmから200cmと、テッポウユリより高く育ち、花径は12cmから13cmとやや小さく、花色は乳白色で花被の外側は中肋に沿って紫褐色を呈している。花粉は紫褐色の個体が多いが、黄色い花粉の個体も存在している。開花期はテッポウユリより遅く、東京では8月中旬から9月上旬に開花する。タカサゴユリは自家受粉で結実する能力が高く、さく果にはテッポウユリより大幅に多い1000粒近い種子があり、種子は発芽後1,2年で開花する点がテッポウユリとは大きく異なっている。日本には1923年に導入されたとのことで、90年以上の歴史があることになる。

シンテッポウユリは上述の2種の交配により作出された園芸種であるが、最初に作出された品種は長野の西村進氏が白色花・黄色花粉のタカサゴユリと青軸テッポウユリを交配して作出した‘アルプス’で、1938年に登録されている。1951年にはこれに再度青軸テッポウユリを交配した‘西村鉄砲1号’が作出された。その後、さらにテッポウユリを複数回戻し交配したシンテッポウユリが数多く作出され、外見はテッポウユリと区別がつかない品種が切り花として広く利用されている。

3. シンテッポウユリの園芸的利用

シンテッポウユリの園芸的利用はまず切り花から始まった。シンテッポウユリはタカサゴユリにおいて最も特徴的な播種後短期間で開花する性質を受け継いだことで、種子系品種の利用が可能となった。種子は球根より初期コストを抑えることが可能なことから、減反政策による稲作からの転換作物としても注目を集め、その利用が広まった。初期の品種は促成栽培時の低温処理に対する反応がテッポウユリより鋭敏でないなどの問題もあったが、テッポウユリの戻し交配が繰り返されたことで、外見も低温感応等生理的特性もテッポウユリと遜色のない品種が開発され、今ではテッポウユリと同様に栄養系品種を用いた促成ならびに抑制栽培で切り花が生産されている。

切り花以外では、緑化の一手法であるワイルドフラワー工法の材料として

の利用があげられる。ワイルドフラワー工法とは、除草や病虫害防除等の手間をかけず、こまめな改植もしない粗放栽培で長期間にわたり花を咲かせてくれる植物の種子を用いた緑化手法で、1990年代から高速道路の法面、河川敷、イベント広場等の緑化に広く用いられている。シンテッポウユリの播種した翌年には花を咲かせる性質がこの工法にマッチしていたことから、ワイルドフラワー工法の材料植物としても利用されるようになった。夏の高速道路で法面に咲く白いユリの姿をご覧になられた方も多いと思われるが、そのユリがこのシンテッポウユリなのである。

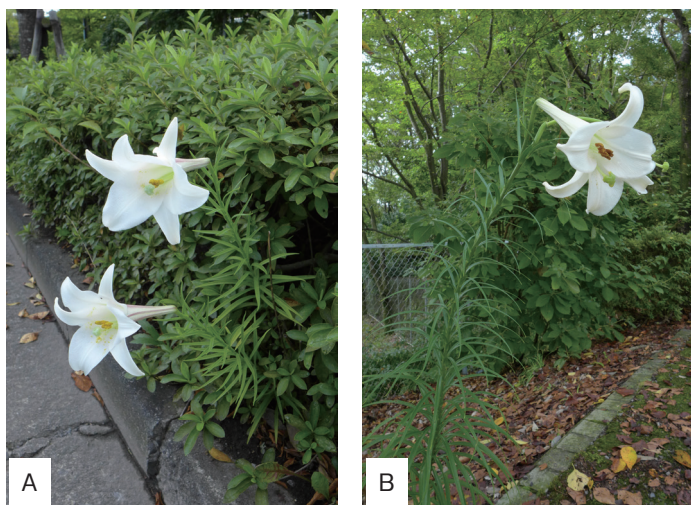
現在、シンテッポウユリがワイルドフラワー工法に利用されているかどうかはわからないが、サカタのタネでは‘ワイルドリリー’という商品名を用い、粗放栽培に耐える強健な球根をセレクトしたブランド、「野放し球根」の1アイテムとしてシンテッポウユリの球根を趣味家向けに販売している。

4. 帰化植物としてのシンテッポウユリ

前述したワイルドフラワー工法ではオオキンケイギク (*Coreopsis lanceolata*) やオオハングウソウ (*Rudbeckia lacinata*) も用いられていたが、これらの種はその強い繁殖力のため、カワラナデシコ等の在来植物の生育に悪影響を及ぼすことが懸念され、現在、この2種は特定外来生物に指定され、緑化に用いることは禁止されている。シンテッポウユリは今のところこれら2種ほどの在来種に影響を与える危惧はないため、2015年3月の時点では特定外来生物には指定されていないが、自然繁殖により毎年確実に生育範囲を広げ、ワイルドフラワー工法が行われたことがないような地域でもその姿を目にするようになってきた。

恵泉の多摩キャンパス周辺では、15年ほど前にはこのユリを目にすることはなかったが、ここ数年、急に目立つようになってきた。数年前はキャンパス近くの公園と道路の境界にある緑地帯で目にするだけであったが、今年はいよいよキャンパスの正門脇でも複数の株が花を咲かせていたのである。多摩周辺での開花期は8月中旬であるが、最初にこの花を見た時は、なぜテッポウユリがこの時期に咲いているのだろうと不思議に思ったことを覚えている。しかし、その花を良く見てみると、葉の形状がテッポウユリとは大き

く異なり、いわゆる柳葉であったことから、次に考えたのはタカサゴユリであった。そこで、さらに複数の個体を観察してみると、花被の外側にタカサゴユリの特徴である紫褐色の色素が認められる個体（第1図A）もあれば、テッポウユリのように花被の外側が白色の個体（第1図B）も多数存在していた。葉の形状に関しては若干個体により違いがあるものの、ほぼ全てが柳葉で、タカサゴユリの特徴を示したことから、シンテッポウユリなのか、タカサゴユリなのか、外見だけでは判断することは困難である。利用範囲の広さ等から判断するとシンテッポウユリと考えるのが妥当のようで、環境省でもシンテッポウユリとして扱っているが、国立環境研究所の侵略生物データベースではタカサゴユリで登録されている。実際、地域によってはテッポウユリの遺伝子が入っていないタカサゴユリが繁殖している可能性も排除することはできないであろう。



第1図 多摩キャンパス周辺のシンテッポウユリ

（2015年8月22日撮影）

A: 花被外側に紫褐色の色素があり、花粉が黄色い個体

B: 花被外側は白色で、花粉が褐色の個体

ところで、この野生化したシンテッポウユリが日本の在来のユリに影響を

与えることはないのであろうか。調べてみると、奄美群島に自生し、絶滅危惧1A類に指定されているウケユリ (*Lilium alexandrae*) に関しては、開花期が重なることから、交雑による遺伝子汚染が危惧されており、実際にウケユリが自生している奄美大島湯湾岳周辺の林道においてはタカサゴユリ（純粋なタカサゴユリかシンテッポウユリなのかは不明。現地の新聞でタカサゴユリと表記されていたので、それに従った）駆除作業を行い、交雑を防いでいる。

一方、その他の日本原産のユリに関しては、シンテッポウユリより開花期が早く、交雑する可能性は極めて低いことから、シンテッポウユリの駆除作業は行われておらず、特定外来生物にも指定されていないため、前述したように球根の入手、栽培ともに可能である。

さて、現在、生育圏を拡大しているシンテッポウユリの今後はどうなるのであろう。2015年の9月に青いさく果を採取し、中を観察してみたところ、正確な計数をしたわけではないが、1000粒以上の未熟な種子が入っていた。これだけの種子が毎年散布されるのなら、開花前の幼苗も見つかるはずと開花株が見つかった周辺を探してみたのだが、わずかに2本、未開花の苗を確認できたのみで、思いのほか個体数は多くないことがわかった。また、この種はある程度大きな個体になると、一時多くの花を咲かせた後、急に枯死することが良くあるらしい。美しい花を咲かせてくれるからと言って、外来種が野生化することは良いこととは思わないが、シンテッポウユリは生物多様性や環境保全の観点から特に問題のない地域においては、コストをかけてまで駆除する必要のない植物なのではないかと考えている。

5. おわりに

今回取り上げたシンテッポウユリのように、園芸的に利用されていた植物が野生化し、勢力を拡大している例は他にも多く存在している。園芸の中でも特に花卉園芸においては、海外から毎年のように新しい植物を導入しているし、今後も外国種が大きな役割を果たすことにはかわりはないであろうが、これからの時代は外国種が野外で繁殖した場合のリスクについて、導入する業者も、一般の利用者も、十分考慮することが求められている。都市部にお

いては、身近な植物の多くがそもそも帰化植物であるため、あまり神経質になっても仕方がないが、今後も末永く園芸を楽しんでいくために、私たち園芸に関わるものたちも今までとは違う努力が求められる時代になっていることを心にとめておきたい。

6. 参考文献

- 国重正昭 花専科育種と栽培ユリ 誠文堂新光社
清水矩宏ら 2001 日本帰化植物写真図鑑 全国農村教育協会
清水基夫 1971 日本のユリ 誠文堂新光社
清水基夫 1989 日本のユリ原種とその園芸種 誠文堂新光社
高橋秀夫 1990 OUTDOOR GRAPHICS 野草大図鑑 北隆館